

北海道銀杏会 第12回講演会

日時 2012年2月15日(水) 正午～13時50分

場所 すみれホテル 4階「すずらん」

講師 北海道立札幌西高等学校教諭 澤田展人様

演題 「生きにくい世を生きる若者たち～作家と高校教員の立場から」

本日は北海道立札幌西高等学校教諭の澤田展人様を講師にお迎えし、「生きにくい世を生きる若者たち～作家と高校教員の立場から」と題して、講演いただきました。澤田教諭は札幌西高等学校で教鞭を執られる一方、北海道文学館NP選書として小説集「魂の歌手」を発刊されるなど執筆活動をされています。

講演内容は、作家としての土台を形成した学生時代から現在に至るご自身の歩みと、定時制高校生の視点も踏まえた現代社会の格差の実情、そして講師にとっての書くことの意味についてでした。普段はあまり光の当たらない若者たちの現実に目を向け、人間としてのやさしさと暖かさのある内容であり、時間が短く感じられる充実した講演会でした。(お話しの内容は以下に簡記)

ご講演いただきました澤田教諭ならびにご参加いただきました会員の皆様に、厚くお礼申し上げます。

1. 自分史

ちょうど学生運動の高揚期と重なった札幌南高校の時期は、その熱気に煽られた学生生活を送りました。不器用な体質で、学年の半分以上が停学となり進級に四苦八苦することもありましたが、一方、刺激を受ける友人にめぐまれました。東大文学部では宗教学を専攻しましたが、学生運動の余波が残りストライキで自宅待機を余儀なくされることもある時代でした。

1977年に卒業したときは早く世に出て仕事をしたいとの考えより、学習研究社に入社し2年間地方支社で営業を行ない、全国5位の成績で社長賞を取るなど頑張りました。しかし組合関係に係る本社の干渉に嫌気が差し、また小説を書く余裕もあると見込んで、通信教育で教員免許を取得し教師の道に方針転換しました。

最初の赴任地は網走の高校で1983年のことでした。夢見た教員生活と厳しい生徒指導などの現実との違いに悩み、体調も崩しました。定時制高校への転校を希望しましたが、次の任地は夕張の全日制高校、1987年のことです。ここでも、同じ苦労が絶えませんでした。

そのようななか、1990年に札幌南高校に来ないかと呼びかけてくれたのが、まだ同校で教鞭を執っておられた高校時代の恩師です。なにかとても照れくさい思いで赴任しました。札幌南高校では分析哲学を英語の原書で読む必修クラブを立ち上げたところ、50人の参加があり、生徒のレベルの高さに感心しました。4年間の全日制を経て同校の定時制に移り、雑誌「北方文芸」への執筆も始めました。定時制では13年間勤めましたが、以前の苦労した教員時代も含め作家の土台になっていると思います。

2. 出会った生徒たち

定時制高校の何人かの生徒との出会いをご紹介します。時には教師としての葛藤や、同じ目線での共感、成長への喜びを分かち合ったことなどを感じさせる人間味あふれる内容でした。

T君～周囲から期待され、それに応えられる生徒だったが、頑張りすぎて中学校で体調不良。学園祭でのすばらしい歌声は今も耳に残っている。入退院を繰り返し、自死。

U君～格闘家を目指し、ついには夢を叶えた。高校時代は痩せていて、体をつくるために給食であまったパンを何個も牛乳で飲み込んでいた。

Oさん～LD（学習障害）の女の子。コミュニケーションを上手くとれず、反応も鈍いが、黙々とやり遂げる。4年生で生徒会長となり、生活体験発表大会にも出場する。生活体験発表大会に向けて、クラスの生徒が応援し練習を手伝い、本番ではLDだが希望を実現したいとの考えを、定められた時間（7分間）で見事に発表した。現在、介護施設に勤務している。

Nさん～中学では暴走族にも加わっていて気が強く乱暴で喧嘩っ早い根は素直。上記Oさんの練習にもつきっきりで手伝った。看護師を目指していたが、勉強資金稼ぎでつとめた風俗店で、超売れっ子となる。その後、結婚し、現在は2児の母親。

e t c . . .

彼ら（彼女ら）との出会いで、人間として生徒を丸ごと受けとめ、認めることの大切さを感じました。若者たちが生きていることに価値を見出せる、自分の能力を発揮できそうな将来があると思える世の中にしていける必要があります。

3. 書くことの意味

決して物質的な豊かさや社会的な地位ではなく、生きることそのものに本当の喜びを求めるべきです。また人は一人で生きていくものではありません。私にとって、書くこととは、その生きる喜びを伝えることです。できれば、喜びを共感して一緒に生きていきたいと考えます。

（文責 渡辺知博）